



フランス、パリからBICの電話

その夏の午後、私は山へ向かうことに決めていた。

町では気温が摂氏42度に達していた。サウジ・カラブリアが、砂漠の暑さとはどういうものかを思い出させてくれていたのだ。OPECへの加盟はまだ認められておらず、イタリアは相変わらず私たちを手放そうとせず、ブリュッセルは毎日違う請求書を突きつけてきて、そのたびに新しい犠牲を求めた。

自分が日々をどう過ごしているのか、考えずにはいられなかった。このところ起きた出来事を思って微笑み、物語の中で、思考の中で、そして携帯にたまったメッセージを読み返しているときに、人間がどれほど脆くなれるものかを考えた。

BIC Franceの取締役会がそろって私の町を去ってから、まだ数日しか経っていなかった。Chanelはその少しあとに発ち、24時間も経たないうちにTelegramでメッセージを送ってきた。

こう書いてあった。

「ホテルの女性が、あなたの電話番号を教えてくださいました。女どうしは、いつもこういうちょっとした親切を交わし合うものです。お会いできて本当にうれしかったし、たいていの男性がすることをあなたがなさらなかったことを、ありがたく思いました。私の体だけでなく、頭にも目を向けてくださった。

でも、ひとりの女として正直に言えば、これで終わりではないと思っています。約束はありません。それよりずっと大きなものです。そして女は、不可能なことを決してあきらめません。

また近いうちに。

キスを。

Chanel」

携帯をしまって自然の中へ消えようとした、ちょうどそのとき、また電話がかかってきた。

国番号はいつもと同じ。

+33。フランス。

Chanelが私と話したがっていた。

すぐには出なかった。

じつのところ、出たのは4度目だ。どの電話も、前の電話のほぼきっかり5分後にかかってきた。

用件が実際どれほど急ぎで、どれほど重要なのかを知りたかった。それを正しく測れる策は、これしかなかった。

母なるGilletteが教えてくれた秘密のひとつだ。

いつでも応じられる、とは決して見せるな。

たやすく捕まる人間になるな。

価値あるものに、ほとんど貴重品のようなものになれ。

そのとき初めておまへの価値は上がり、そのとき初めて人はおまえをしかるべき目で見える。

やがて、出るべき時が来た。

彼女は苛立った声で、いきなり、どこへ消えていたのかと尋ねた。

大事なことなのだ。

急ぎなのだ。

もう一度、会う必要がある。

ただし今度は最高レベルになる、と彼女は言った。

「誰です」と私は尋ねた。「ヴァチカンのローマ教皇ですか」

「いいえ」と彼女は笑って答えた。「あなたは相変わらずですね」

その言い方は、彼女がもう私という人間を知っているかのようだった。

それから彼女は続けた。

「BICの最大の持ち株を握っている一族が、あなたに会いたがっています。それに、私から見ても不思議なことに、全員が女性なんです。男性はひとりもいません」

「パリへ来てくださいますか」

「空いているラクダがいくらするのか、見てみないと」と私は答えた。「それに、ご存じのとおり、私はごくわずかな金で暮らしていますから」

「ただひとつの理由から、来てくださるとわかっていました」と彼女は答えた。

「ご本を読んで気づいたんです。あなたは女性に決してノーと言わない。それはエレガンスと、スタイルと、品格の問題です。あなたの作品を読めば、誰にでもわかります」

「赤面させないでください」と私は言った。「電話ではどうせお気づきになれないのですから、なおさらです。それで、正確にはいつ伺えばよろしいですか」

「いつでもお好きなときに。お約束は必要ありません。シャンゼリゼのカフェの中でお会いすることになります。お飲み物は、何でも好きなものをどうぞ」

「手はずを整えて、近いうちにお知らせします」

「さようなら」

「さようなら」

電話が切れたあと、私は長いあいだ考えこんだ。

それでも、どんな考えも、並外れた女たちの即興の中にひそむ現実には、決して届きはしなかった。

フェルディナンド